「最高のバトンタッチ」

明日の翼　（30 代）

空がまだ暗い時間に、静かに玄関のドアが閉まる音がする。時計の針は午前四時。日勤の私が寝ている中、妻は小さなキャリーケースを引いて仕事へと向かっていく。

妻の勤務時間は不規則だ。早朝に出発することもあれば、午後から出勤することもある。そして業務の都合上、遠方の街のホテルに宿泊し、数日間家に帰らないこともある。新婚でありながら、私たちが揃って食卓を囲める日は決して多くない。

すれ違う時間が多いからこそ、我が家の家事は自然とリレー形式になった。

私が仕事から帰り、自分の夕食を作るついでに、翌日帰宅する妻の分もタッパーに詰めて冷蔵庫に入れる。「お疲れ様、温めて食べてね」とマスキングテープに書いて貼っておく。

翌朝、私が目を覚ますと、深夜に帰宅した妻が畳んでくれたタオルが棚に綺麗に並んでいて、洗面台の鏡には「ごはんありがとう、生き返った！」という見慣れた丸文字の付箋が貼られている。

私たちは、バトンを渡し合うように日々の生活を回している。

妻がいない夜、真っ暗な部屋に帰宅して一人で電気をつける瞬間は、少しだけ寂しい。けれど、冷蔵庫を開ければ、彼女が旅立つ前に作り置きしてくれた色鮮やかな副食が並んでいる。それをレンジで温めながら、今頃遠い空の下で働いているであろう彼女を思う。

逆に、彼女が長時間の業務を終え、疲労困憊で帰ってくる日には、私が部屋を隅々まで掃除し、いつでも眠れるようにベッドを整え、温かいスープを仕込んでおく。

アイロンがけされたシャツ。水滴一つないシンク。冷蔵庫に並んだタッパー。

この家の中にあるささやかな痕跡の一つひとつに、「あなたの毎日が少しでも楽になりますように」という、お互いの無言のエールが込められている。同じ時間・同じ空間にいなくても、私たちはお互いのぬくもりを感じ取ることができる。

久しぶりに二人の休みが重なった休日の朝。

明るい陽射しが入るキッチンに並んで立ちながら、「今日の卵焼きは私が作るね」「じゃあ、俺はコーヒーを淹れるよ」と言って笑い合う。

すれ違う日々の生活の中で、思いやりのバトンを落とさないように渡し合いながら、私たちは私たちなりの家族の形を少しずつ築き上げている。